

平成三十年度

日本近世文学会秋季大会

- ・ 大会プログラム
- ・ シンポジウム要旨
- ・ 研究発表要旨

期日 十月二十日(土)・二十一日(日)・二十二日(月)

会場 愛媛大学 南加記念ホール

〒790-8577 愛媛県松山市文京町三

- 一、出欠の葉書を九月二十八日(金)必着でお出ください。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(慶應義塾大学)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費八千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇一六一〇一三三三三九五、口座名「日本近世文学会秋季愛媛大学大会」)で、九月二十八日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、三日目(十月二十二日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。各自・各グループでお回りにください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会秋季愛媛大学大会事務局

愛媛大学法文学部人文社会学科 神楽岡幼子研究室

〒790-8577 愛媛県松山市文京町三

電話 〇八九一九二七一九三二五(研究室直通)

メールアドレス kagura@ehime-u.ac.jp

※会場校の負担軽減のため、大会二日目の会場校による昼食(弁当)の提供はございません。各自ご用意ください。また同様の理由から、不参加者用の発表資料送付もおこないません。会員各位のご理解ご諒解をお願いいたします。(事務局)

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、平成三十年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成三十年九月十日

【会場】愛媛大学

【行事】

第一日 十月二十日（土）

委員会（二二・二〇〇～二三・四〇）

委員会会場 法文学部本館八階大会議室

大会受付（二三・〇〇）

開会時間（二四・〇〇）

シンポジウム（二四・一〇〇～二七・二〇）

シンポジウム会場 南加記念ホール

日本近世文学の可能性―地域からの発信

（第一部）愛媛大学図書館所蔵「鈴鹿文庫」から見えるもの

（第二部）愛媛の芸能と近世芸能

懇親会（二八・三〇〇～二〇・三〇）

懇親会会場 道後温泉ふなや（三階 光輪の間）〒790・0842

電話 〇八九―九四七―〇二七八

愛媛県松山市道後湯之町一―三三

日本近世文学会秋季大会会場校代表 神楽岡幼子
日本近世文学会事務局代表 津田眞弓

【事務局連絡先】

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉四―一―一

慶應義塾大学経済学部 津田眞弓研究室

電話 〇四五―五六六―二一八二

e-mail info@kinseibungakukai.com

神楽岡幼子（コーディネーター）、小助川元太（コメンテーター）

田中仁（司会）・福田安典・川平敏文

廣瀬千紗子（司会）・大本敬久・山田和人

第二日 十月二十一日(日)

大会受付(九・〇〇)

研究発表会 午前の部(九・三〇)～(二・二〇)

研究発表会会場 南加記念ホール

1 富川房信の浄瑠璃利用の傾向と方法

愛媛大学(院) 新井 恵

2 『^{安芸ノ原}那賀野原 糸車九尾狐』における浄瑠璃『奥州安達原』、謡曲『善知鳥』の利用について

早稲田大学(院) 根本 育実

3 『当世百歌仙』の刊行とその周辺

佐賀大学 三ツ松 誠

4 伊勢における古風歌集の編纂―『経雅卿雜記』所収『歌之部』の検討を軸に―

梅光学院大学 倉本 昭

5 栗田樗堂『萍窓集』小考―『石耕集』との選句を比較して―

庚申庵倶楽部 松井 忍

昼 休 み(二・二〇)～(三・三〇)

編集委員会会場 法文学部本館二階中会議室

研究発表会 午後の部(一・三・三〇)～(二・五・五〇)

6 『呉服文織時代三國志』にみる都賀庭鐘の歴史認識―室町の学問の継承として見た場合―

愛媛大学 田中 尚子

7 柳亭種彦と葛飾北斎・西村屋与八の関係―文政期江戸出版の構図―

実践女子大学 佐藤 悟

8 直島三宅家蔵「里見家臣八犬士武勇画」について―瀬戸内に眠る馬琴遺品―

東郷町立東郷中学校 服部 穰治

9 崑山の情誼―馬琴をして『八犬伝』第百三十二～四回を書かしむ―

同朋大学 服部 仁

閉 会(二・五・五〇)

第三日 十月二十二日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

図書展示 愛媛大学図書館 鈴鹿文庫貴重書展

日時 十月十七日(水)～十一月十二日(月)一〇・〇〇～一六・三〇開館、入館は一六・〇〇まで。

場所 愛媛大学ミュージアム・エントランスホール

シンポジウム

日本近世文学の可能性―地域からの発信

愛媛大学 神楽岡幼子

愛媛に残る文芸資料は多種多様である。愛媛大学図書館所蔵の鈴鹿文庫には「方丈記」や兼好にまつわる興味深い近世写本やその写しが残されている。今に伝わる愛媛の芸能のなかには元禄歌舞伎の軽業芸につながる芸態が残るものもある。山車の懸想幕に古典を素材とする意匠が見られる祭礼もある。学問の世界から芸能の世界にいたるまで、興味はつきない。今回はふたつの切り口を用意した。愛媛のおもしろさを発見していただければと思う。

(第一部)

愛媛大学図書館所蔵「鈴鹿文庫」から見えるもの

(司会) 大正大学 田中 仁

神の国のほとりの方丈―『方丈記』異文

日本女子大学 福田 安典

鈴鹿三七は『方丈記』、特に異文(略本)の研究者であり、鈴鹿文庫には数種の『方丈記』が所蔵されている。その整理を

通して、近世期における『方丈記』のありかたを考える必要性を感じた。『方丈記』は広本系が底本となることが多いが、近世期にも流布本系で読まれている。しかし、その時代に特異な本文を持つ略本系も書写されていたのである。本シンポジウムで略本系の中原本『方丈記』を取り上げて問題を提起したい。

吉田家と徒然草

九州大学 川平 敏文

近年、小川剛生氏により、『徒然草』の筆者・兼好の伝記は、室町期の神道家・吉田兼俱により捏造された可能性があることが指摘された。本報告ではまず、平成の国文学研究史上、最大のトビックスと言ってよいこの説の画期性について紹介する。次いで、近世初頭における『徒然草』の本格的な流布の背後にも、吉田家の影が見え隠れすることを指摘する。さらに、近世において創造された兼好伝記(伝説)の考察において、小川説がどのような意味を持つかについても言及したい。

(第二部)

愛媛の芸能と近世芸能

(司会) 同志社女子大学 廣瀬千紗子

近世伊予の祭礼と芸能―吉田祭・川名津神楽を中心に

愛媛県歴史文化博物館 大本 敬久

愛媛県（伊予国）は江戸時代には松山藩・西条藩・宇和島藩など八つの藩にわかれ、現在でも東部の「東予」、中央部の「中予」、南西部の「南予」の三地域に区分され、民俗文化の地域差が著しいのが特徴である。本報告では近世から現代まで継承、変容した愛媛各地の祭礼、芸能の地域差を紹介するとともに、代表的な事例として「吉田祭」（宇和島市）、「川名津神楽」（八幡浜市）を取り上げ、祭礼・芸能文化の伝播と継承について考えてみたい。

近世芸能研究から見る川名津神楽

同志社大学 山田 和人

川名津神楽の特徴のひとつは、最後に行われる「柱松登り」の神事であり、祭りの庭に立てられた柱に張られた綱を伝い降りる軽業は蜘蛛舞を想起させる。また、仮設の神楽殿の天井の梁を伝う軽業芸や神楽全体の演劇的な構成などを見ると、この祭り自体がいわば軽業芝居とも言うべき性格を備えていることに気づく。歌舞伎やからくりの絵画資料等や実際の映像を参照しながら、民俗芸能が近世芸能の研究資料たり得る可能性について考えてみたい

全体コメント

愛媛大学 小助川元太

愛媛大学図書館 鈴鹿文庫貴重書展のご案内

秋季大会にあわせて、愛媛大学図書館鈴鹿文庫の展示をいたします。鈴鹿文庫は鈴鹿本『今昔物語集』旧蔵者鈴鹿連胤を曾祖父に持つ鈴鹿三七の旧蔵書です。

会期 二〇一八年十月十七日（水）から

十一月十二日（月） ※火曜日休館

会場 愛媛大学ミュージアム・エントランスホール

●おもな展示品（予定）

- 『神道大意抄』（写本） 吉川惟足著
- 『唯一神道名法要集』（写本）
- 『唯一神道大要』（写本） 吉田兼見著
- 『種生伝』（正徳二年刊）
- 『異本 方丈記 中原本』（写本）
- 『倭国軍記』（写本） 吉田兼俱著
- 『中臣祓抄』（写本）
- 『つれづれ東雲』（刊本）
- 天治本『新撰字鏡』副本（写本 連胤作成）
- 『伴氏稿目』（写本）連胤が書写した伴信友の著作稿本目録
- 『日次紀事』（貞享年間刊）三七の書き込み付箋がある
- 『夫木和歌抄抜書』（写本）西順自筆、木村兼葭堂旧蔵
- 『狂歌百鬼夜興』（文政十二年刊）菊廼屋真恵美編
- 『桂園宗匠撰草稿』（写本）

富川房信の浄瑠璃利用の傾向と方法

愛媛大学(院) 新井 恵

本発表では、富川房信の浄瑠璃を利用した草双紙における傾向と方法を明らかにする。

草双紙は演劇と密接した関係にあり、青本期に活躍した富川房信の作品もその例外ではなく、浄瑠璃を典拠とする一群が確認される。これらの作品を分析した結果、浄瑠璃全体を均一に利用するのではなく、初段・二段目といった前半を多く利用する傾向にあることが明らかになった。この傾向は宝暦から安永に到るまで見られる。

さらに、このような前半を利用する作品は、その利用方法において一つの特徴が指摘できる。今回、例に取り上げる青本『鬼女物語』(明和五年刊)は浄瑠璃『車還合戦桜』を典拠とし、『鬼女物語』の上巻中巻はその初段と二段目を利用してゐる。この際、『鬼女物語』は『車還合戦桜』に示された事件性ある局面を撰取し、これを次々に展開させながら、常に事件が巻き起こるといふ構成をとる。また、三段目以降を利用した『鬼女物語』の下巻は、ここまでの積み上げを生かして『車還合戦桜』とは異なる独自の山場を作り、事件の解決を示す。以上のような『鬼女物語』に見られる作法はその他の数多くの浄瑠璃利用作品にも共通して見られ、房信の浄瑠璃利用の方法と考えることができる。

『安達ヶ原 糸車九尾狐』における浄瑠璃 『奥州安達原』、
那須野原 謡曲 『善知鳥』の利用について

早稲田大学(院) 根本 育実

山東京伝の合巻『安達ヶ原 糸車九尾狐』(文化五年刊)は、野州那須野の殺生石伝説で知られる、九尾狐譚に基づく作品である。本作が当時の九尾狐譚の流行に影響を受けたであろうことは、『山東京伝全集』第六巻解題(平成七年、棚橋正博氏解題執筆)などで述べられており、特に佐藤悟氏「山東京伝の文学と絵画―『糸車九尾狐』と『絵本玉藻譚』」(平成二十年)において、本作が文辞、挿絵の複数の点で岡田玉山『絵本玉藻譚』(文化二年刊)に依拠していることが既に指摘されている。

一方、本作が浄瑠璃『奥州安達原』(宝暦十二年初演)三段目切、通称「袖萩祭文」の場面と詞章を利用していることは、小池藤五郎氏(『山東京伝の研究』、昭和十年)、水野稔氏(『京伝合巻の研究序説』、昭和三十三年初出)が指摘するものの、具体的な検討はこれまで行われていない。また本作の該当場面において、京伝は自身の読本『善知安方忠義伝』前編(文化三年刊)でも利用した謡曲『善知鳥』を用いているが、「袖萩祭文」には、本作の如く『善知鳥』を利用した箇所は存在しない。

本発表では、本作の該当場面において、京伝が「袖萩祭文」の場面と詞章を自在に用いる一方、幼子を前に父親が切腹するという、該当場面の悲劇的な雰囲気を感じ上げる背景音楽として、『善知鳥』を巧みに用いていることを示す。更に本作における『善知鳥』の利用方法が、本作以降の京伝合巻作品における『善知鳥』の利用に受け継がれていったことを指摘したい。

『当世百歌仙』の刊行とその周辺

佐賀大学 三ツ松 誠

多田清興『当世百歌仙』（安政二年（一八五五）本居豊穎序）は幕末同時代人の作品から編まれた異種百人一首として知られ、入撰者を評価する際にその力量を証明するものとして本書を用いる例も見られる。しかし本書の評価が定まらないのは、そこに入撰したことの意味付けも難しいのではないかと考えられる。しかるに伊藤嘉夫異種百人一首の成立（『跡見学園国語科紀要』一九、一九七一）以来、異種百人一首の一例として本書を取り上げるのが通例だった。幕末和歌史の中に本書を定置しようと試みる所以である。

諸本検討に拠って版本を大別するに、表紙・裏表紙に桃の飾りをあしらった本文用紙に絵柄を刷ったものと、表紙・本文共に無地のものとの、二系統が存在する。そして前者に限り、巻末の人名録中、二名分の通称が未詳のままであることから、後者が新しいと判断される。前者にはまた、紀州藩の長沢伴雄の名前が載るものと載らないものが存在する。本書の刊行には伴雄の編んだ『詠史和歌集』等と同じく紀州の書肆阪本屋喜一郎が関わっており、徳川治宝死後の藩内情勢変化に伴う伴雄の失脚・逮捕と本書の在り方との関連が推測されよう。

この推測を、肥前の古川松根、出雲の森為泰らに関する資料をも参照しながら跡付けることで、各地の国学系歌人が出版を通じて名声を競った新しい時代として和歌史の幕末を捉える立場に棹差さんとする。これが本報告の目指すところである。

伊勢における古風歌集の編纂

— 『経雅卿雜記』所収『歌之部』の検討を軸に —

梅光学院大学 倉 本 昭

内宮禰宜・荒木田経雅の『経雅卿雜記』第十一巻は、『歌之部』と題される古風歌集となっている。収載歌は全て万葉仮名表記で、賀茂真淵と二門、本居宣長・稲掛茂穂（のちの本居大平）、そして荒木田久老・経雅ら内宮ゆかりの和学者の歌が並ぶ。

このたび、調査により、経雅と親しい内宮権禰宜・蓬萊尚賢が編んだ『擬古詩集』全一卷と『歌之部』では、採られた歌の重複が目立つことが判明した。

尚賢の『擬古詩集』は経雅の『歌之部』に先行して編まれ、経雅に影響を与えたことは確実である。また、注目すべきは、二人に県門の人々が詠んだ和歌を教えた土岐建雄の存在である。建雄は本居宣長とも交流し、宣長門の稲掛茂穂に、やはり県門の人々の和歌を教示した。それらが茂穂の手で『八十浦之玉』原本と呼ばれるものに書き留められる。

ところが、建雄から尚賢・経雅に伝えられた歌群には、茂穂に教示されなかったものがあつた。それらは『歌之部』を編んでいた経雅を通して茂穂に伝えられ、やはり『八十浦之玉』原本に書き留められた。尚賢や経雅の手になる古風歌集が、一卷というコンパクトなものながら、大平の『八十浦之玉』に先行して成っていたことには意義がある。

経雅は大平に自分が知る歌を教示して後、彼との交流を深める中、『八十浦之玉』原本に触発されて『歌之部』に代わる歌集『神宮先輩近來国学人歌集』の編纂に着手したのであつた。

栗田樗堂『萍窓集』小考

—『石耕集』との選句を比較して—

庚申庵倶楽部 松 井 忍

松山の豪商栗田樗堂（寛延二年～文化十一年）は、紀行文「つましるし」を晝台に高く評価されて以来、尾張や京の俳人を通して知られるようになる。また、寛政七年春、八年秋、九年春の二度松山に滞在した小林一茶との交流は良く知られており、その頃から大坂の俳人との交流も深まる。寛政十二年には芭蕉の幻住庵に做って隠棲を企図して煎茶の庵でもある庚申庵を営み、晩年は御手洗に移り住み、旅人として最期を迎える。

本発表では、樗堂自選の『石耕集』と『萍窓集』を比較してその選句意識の違いを見ていきたい。『石耕集』は、文化四年秋の自序を持つ自筆稿本で、『萍窓集』は御手洗の鹿門・才馬編で文化九年刊の樗堂生前唯一の刊行句集である。稿本と刊本の違いは大きいのが、完成の時期が近いこと、いずれも樗堂自身の選句によること、『石耕集』二五八句『萍窓集』三〇四句と句数が似通っていることなど、共通点も多い。しかし、共通する句が半分にも満たないことには注意を払う必要がある。樗堂は、御手洗移住によって世俗の世界から離れた俳諧三昧の生き方を実現することができたが、そのことが二作の選句に影響を与えていると考えられる。それぞれの句を選んで検討していきたい。

『石耕集』は御手洗以前の作を適宜選句したのに対して、『萍窓集』は、明確な意図のもと、芭蕉思慕と自身の風狂のあり様を描き出そうとしたものと考えられる。そこには、蕉風復興の最後の流れを真摯に受け継ごうとした地方俳人の一典型がある。

『呉服文織時代三國志』にみる都賀庭鐘の歴史認識

—室町の学問の継承として見た場合—

愛媛大学 田 中 尚 子

安永十（一七八一）年、都賀庭鐘の『呉服文織時代三國志』が刊行される。都賀庭鐘に対する関心の高さに反して、本作に関する先行研究としては濱田啓介氏の『呉服文織時代三國志』について（『国語国文』三九・四 一九七〇・四）、梁蘊嫻氏の『呉服文織時代三國志』の虚構と真実―都賀庭鐘の歴史観―（『国語と国文学』九四・四 二〇一七・四）くらいしか見出せないのが現状である。『三國志』の名を冠しつつも、内容がそれとはかけ離れ、原拠と比較することの難しさが影響しているといったところだろうか。

本発表では先行研究の成果を踏まえつつ、本作品の志向について検討する。本作品で注目すべきは第二段で唐突に神功皇后の三韓征伐が語られる点、そしてその唐突さを和らげ、作品全体に一貫性を持たせる存在として伝国璽・三種の神器が利用される点にあると考えるが、これらは『神皇正統記』等から見られた、他国との比較を通じての自国の優位性の主張という室町期に展開された学問や注釈に通ずるものがある。つまり、本作品は室町の学問を継承する書と見なした際に、作者の執筆意図や歴史観が見出せ、三國志自体を語るよりも寧ろ日本を語るための枠組として三國志が用いられたと捉えられるのである。

尚、この考察は日本における三國志享受の通史的把握（拙著『三國志享受史論考』〈汲古書院 二〇〇七・一〉等参照）を行う上でも大きな意味を持つ。発表ではその点にも言及する。

柳亭種彦と葛飾北斎・西村屋与八の関係

— 文政期江戸出版の構図 —

実践女子大学 佐藤 悟

葛飾北斎は享和期に柳亭種彦の狂歌摺物を、文化期には種彦作読本の挿絵を担当し、種彦の日記には単なる作者と画工の関係を越えた北斎との親密な交流が記される。種彦が西村屋与八から合巻処女作『鱸包丁青砥切味』を刊行する契機となったのも、北斎門人蘭亭北嵩による仲介であり、北斎はその直後に西村屋から刊行された種彦作の読本『勢田橋竜女本地』の挿絵を担当している。

その後、種彦は西村屋から歌川国貞画の合巻『正本製』を刊行する。この作品は文化元年の色摺禁止令に伴う役者絵本の代替としての性格を持ち、役者絵、劇場図などと補完する関係にあったことは国貞画「大坂道頓堀芝居楽屋ノ図」によって知られ、種彦の西村屋刊行の劇場図、浮世絵への関与が想定できる。

一方、北斎は色摺禁止令以後、角丸屋甚助主導による『北斎漫画』等の絵本を多数刊行する。しかし文政五年以前に角丸屋甚助は死亡したと想像され、新たに西村屋が北斎との関係を深め、文政六年刊『今様櫛搔雛形』、文政七年刊『新形小紋帳』を刊行する。両書とも種彦の序文を備える。文政九年刊種彦作『還魂紙料』は挿絵を北斎が担当している。北斎は文政十年以降に謡曲「歌占」を画題にした作品を四点遺しているが、これは種彦との『還魂紙料』刊行作業から得た知見の成果といえる。

本発表は種彦を軸とした北斎と西村屋の関係を示し、文政期の戯作と浮世絵刊行の新たな枠組みを提示するものである。

直島三宅家蔵「里見家臣八犬士武勇画」について

— 瀬戸内に眠る馬琴遺品 —

東郷町立東郷中学校 服部 穰 治

瀬戸内に浮かぶ直島の庄屋を代々務めた三宅家には、三宅氏が、保元の乱で破れ讃岐に配流された崇徳院の後胤であるとする伝承が今も残る。

三宅家は幕末期に、崇徳院の神霊を讃岐から京都に還幸させるための運動に参画し、京都白峯神宮の創建に関わることになる。三宅家の二十八代当主三宅源左衛門は、それに先だって、天保七年に曲亭馬琴のもとを訪問し、「崇徳院御廟の碑」の碑文を依頼していたことが、天保七年六月二十一日小津桂窓宛書翰、『滝沢家訪問往来人名簿』に記載されている。

三宅家には、本居大平に国学を学び、本居宣長や平田篤胤に傾倒し、その影響のもとに日本神話や歴史画を描いた勤皇画家、佐藤正持が食客として滞留していた時期があり、その際に残した崇徳院にまつわる襖絵や幅物など、数多くの作品が現存する。

本発表では正持が八犬士を描き、馬琴の知友であった讃岐高松藩家老木村黙老が自身と馬琴の賛を付した、三宅家所蔵の幅物「里見家臣八犬士武勇画」を紹介し、この幅物が馬琴の遺品であることを『南総里見八犬伝』の記述、書翰類などから確認する。その上で、正持の描いた八犬士の姿を板本の挿絵と比較しながら検証し、「里見家臣八犬士武勇画」が馬琴文学の周辺にあった人々の交流を物語るものであるという意義を明らかにする。

峯山の情誼

—馬琴をして『八犬伝』第三百三十二〜四回を書かしむ—

同朋大学 服 部 仁

『南総里見八犬伝』第三百三十二〜四回の粗筋を述べる。

八犬士が金碗氏を称する勅許を得るために、大江親兵衛が上京すべく、二百石の大船で浪速に向かう。途中時化に逢い、三河国苛子崎に停泊していると、渥美郡領隣尾家から海賊船監視の役人が来て、奥郡の城へ出頭を求めた。親兵衛は蟹崎照文らを行かせた。そこへ酒などを売る船商人が来、買い食いたした水夫たちは毒にあたる。実は役人も商人も、すべて海賊であった。靈玉の力で命拾いした親兵衛は奮戦したが、海中に引き込まれる。奥郡へ向った照文たちは、途中の蕃山で海賊に攻めかかれるが、海賊捕縛のため自ら出向いた隣尾伊近の兵と共に、海賊を誅伏した。親兵衛は代四郎に救われた。

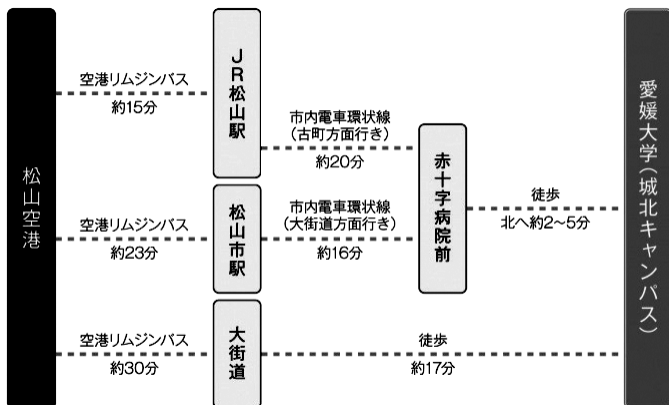
(後略)

毒酒(陀陀花酒)という『水滸伝』の趣向に目が行き、何故、時化の風避けを苛子崎(伊良湖崎)でするのか、という疑問に辿り着かない。遠江の新居から渥美半島の伊良湖までの太平洋岸は海食崖で、大船が入港できる港はない。伊良湖水道のあたりで風待ちをするなら、鳥羽の方が大港であり相応しい。また伊良湖にも港はあるが、二百石の大船ならば、三河湾へ入って福江港まで行くのが普通であろう。しかも、伊良湖から福江、福江から田原へは、相当の距離がある。なぜ伊良湖なのか。

馬琴が、親兵衛をわざわざ伊良湖へ立ち寄らせたのは、馬琴の息宗伯の死に顔を描いてくれた田原藩江戸家老渡辺峯山の厚情に、馬琴なりに報いた結果であったことについて述べる。

MEMO

会場へのアクセス



- ※空港リムジン… JR 松山駅まで¥460、松山市駅まで¥560、大街道まで¥610
- ※市内電車環状線…一律¥160
- ※タクシー(松山空港～愛媛大学)…所要時間約30分・¥3,000程度
- ※伊予鉄バス東西線…¥160(本数が少ないのでお気をつけ下さい)
- ※空港リムジン・伊予鉄バス・市内電車には、交通系ICカードはご利用出来ません。

会場案内図

